



根切りして拾い上げ直前（7月下旬）のたまねぎ畑

秋まきと春まきの組み合わせで 長期出荷が可能なたまねぎ産地を目指して ～花巻・北上北地域～

たまねぎ導入の経緯

花北地域では、花巻農協が農業法人等への園芸品目導入を推進しており、以前から小麦との組み合わせが可能な品目として、加工業務用の秋まき作型たまねぎ（以下、秋まき作型）の栽培に取り組んできました。花巻農協では、機械移植用のポット苗の育苗を受託して、たまねぎの育苗に慣れた方でも取り組みやすい体制を構築していました。

また、平成二十四年度には、たまねぎ生産組合を設立し、歩行型移植機・歩行型収穫機・ピッカーを導入し、機械の共同利用による作業の軽労化にも取り組みました。

更に、平成二十七年からは出荷作業の省力化を進めるため、鉄コンテナを利用

した出荷にも取り組んでいきます。

「春まき作型」導入の経緯

水稲と小麦・大豆を組み合わせている農業法人の中には、降雪が早まると大豆の収穫が終わらず、低単収により収量払いが受けられない年もあり、大豆以外の品目を検討したいという思いがありました。

また、小麦栽培に取り組む農業法人では、秋まき作型では、収穫時期が小麦と重複することから、秋まき作型には取り組みにくいという事情がありました。

こうした中、平成二十七年に本県での春まき作型たまねぎ（以下、春まき作型）の研究紹介されたことを受け、小麦と水稲の間に収穫できる品目として、春まき作型に注目する農業法人が現れました。

②排水対策をしっかりとやる

たまねぎに限らず転作作物は、排水性の悪い場所の生育が良くないことは知られており、排水対策を行うことが、生育・収量を確保するうえで重要です。

しかし、平成三十年年度のように定植後の降雨が極端に少ない場合、排水性を良くしたことにより、圃場が乾きすぎることもあり、排水対策と灌水手段の確保をセットで出来る圃場を選ぶことが望ましいと考えられます。

③雑草を如何に抑えるか

本県における春まき作型は、秋まき作型と異なり、マルチを使わない栽培方法が一般的であり、体系的な除草剤の使用が必須となります。

農業研究センターの研究成果は、畑地での試験であ

ったことから、水田転換畑では除草剤の使用体系を一部見直しする必要があるかもしれません。

さらに、平成三十年度は除草体系の柱となっていた除草剤の収穫前日数が変更となったことを受け、体系の根本的な見直しも余儀なくされています。

当面、新しい除草体系が確立されるまでの間は、登録のある除草剤を利用し、たまねぎの生育や収穫に大きな支障が生じないように一部手取り除草を組み合わせてるしか無い現実に直面しています。

④圃場の計画的な利用も重要

連作年数が多くなると病害虫の発生が増加することが懸念されます。

関東以西の主要たまねぎ産地では、輪作や2毛作に組み入れ、連作しない体系を

取っていることから、当地域においても麦等との輪作体系を組み立て、病害虫の発生リスクを抑えていくことが重要になると考えられます。

今後の課題

水田におけるたまねぎの大規模栽培体系については一定の目処が立ちました。①除草剤の使用体系、②作業体系や圃場の肥沃度に応じた施肥体系、③収穫後の乾燥・調製体系の見直し等が新たな課題として残されています。

特に乾燥・調製について、大規模栽培では、圃場で一定期間乾燥させた後、乾燥機で仕上げる体系を取っています。この体系では収穫期間の降雨日が多いと収穫作業の停滞や乾燥不足に繋がり、出荷後にたまねぎが腐敗するリスクが高くなります。



オニオンピッカーでたまねぎを拾い上げます



ディガーでピッカーの作業する畝を集約します



たまねぎをサイズ別に仕分けします



乾燥機で乾燥させた後、鉄コンテナから調整ラインにたまねぎを移します

産地の信頼を損なわないためにも、乾燥調製施設の整備など、体系の改善に取り組んでいく必要があります。

秋まき作型から始まった当地域のたまねぎ栽培ですが、春まき作型の面積が拡大しており、普及センターでは関係機関と連携しながら経営体の収益向上に向けた長期出荷が可能なたまねぎの産地づくりを支援して行きます。

（文 中部農業改良普及センター）